

世界のマンゴー市場(要約部分抜粋)

[FreshPlaza](#) 2025年8月22日

世界のマンゴー市場は現在、供給過剰や価格の下落に直面している地域もあれば、安定した需要と輸出機会の増加という対照的な傾向を報告している地域もある。気象条件、貿易政策、及び消費者の嗜好の変化は引き続き、主要生産国における生産、価格設定、市場動向に影響を与えている。

イタリアでは、観光地におけるマンゴーの販売は好調であるが、複数の産地からの供給過剰により価格は圧迫されている。バジリカータ州での国内産の収穫が間もなく開始される見込みである。

スペインでは、マラガ産のトミーアトキンス種及びアーウィン種のマンゴーの収穫が進行中であり、一方、生産量の大半を占めるオスティーン種の収穫は間もなく開始される予定である。予測では、今年の降雨及び果樹の休眠の改善に支えられ、3万~3万5千トンの収穫が見込まれる。

オランダでは、数週間にわたる供給過剰と需要低迷により、市場は引き続き圧迫されている。価格は安定したものの、依然としてコストを下回っている。スペインとブラジルからの追加の供給が予想される。

ドイツでは、供給過剰とスーパーマーケットによる販促活動の増加により、7月からの価格が下落している。10月以降は、特にブラジル産のキーツマンゴーを中心に不足が予想される。

フランスでは、消費の低迷が販売に影響を及ぼし、価格の下落につながっている。スペイン産のオスティーンマンゴーは市場シェアを拡大しており、数量は今年の3倍に達している。

北米ではメキシコ産マンゴーの供給が終了する一方で、ブラジルは米国による50%の関税の中で出荷準備を進めている。米国は1,200万箱のブラジル産のうち300~400万箱しか受け取らない可能性があり、ヨーロッパがより多くの果実を吸収するものと見込まれる。

ブラジルでは、春の熱波により開花が減少したものの、その後のマンゴーの出荷は安定している。米国による関税にもかかわらず輸出は継続しており、出荷量は2024年に比べて32%増加する可能性が有る。

メキシコではマンゴーの出荷シーズンが終了したばかりであり、輸出は昨年と比べてわずかに増加した。次のシーズンは2026年1月に始まる予定である。

インドでは、アルフォンソ種とケサール種を中心に出荷シーズンが着実に終了した。ただし、アルフォンソ種の出荷期間は大雨のため短縮された。輸出業者は、シンガポール、カナダ、英国、米国等の従来からの市場への安定した出荷を報告している。

パキスタンでは、チャウンサ、アンワラトール等の高級品種について中東及びヨーロッパから強い引き合いがある。南アフリカと中央アジアの新興市場も有望な需要を示している。

フィリピンでは、ルソン市で開催されたマンゴー会議において、500名以上の関係者がテクノロジー、病害虫防除、及び協同組合を通じた近代化について議論した。

南アフリカの果樹園は、新シーズンを前に開花中である。2024/25年度の収穫量は7万236トンであり、そのうち9%が主に中東向けに輸出された。

エジプトでは、マンゴーの出荷量は昨シーズンの70~80%にとどまっているが、周辺国及びロシアからの需要は依然として強い。ヨーロッパのバイヤーは、特にナオミ等の国産品種への関心を高めている。

セネガルでは、輸出量が今年の9千トンに対し2万7千~3万トンで終了しつつある。生産はミバエの防除の改善により支えられているが、冷蔵設備の制約により輸出の可能性は限られている。